



モダンなマンサード屋根
開業時の姿のままに

西桐生駅舎（上毛電気鉄道）

昭和3年（1928）に開通した上毛電気鉄道は、戦前から戦後にかけて織物の町桐生と製糸の町前橋を直結する軌道交通として発展した。開通と同時に西桐生駅は開業したが、当時の駅周辺は吾妻山系からの清流が国鉄（当時）桐生駅前の蟹川まで続き、両側の桜並木が壮観だったという。長閑な風景の中に現れた腰折屋根（マンサード屋根）のモダンな西桐生駅舎は桐生の市民を驚かせたに違いない。駅周辺の景色も時代と共に変わり、戦後の山手通りの拡張工事により、清流は暗渠となり、桜並木も伐採されて柳の並木に変わった。その柳も昭和48年（1973）に最後の一本が切り倒された。

駅舎は木造平屋建て、中央改札口の屋根が2段階の傾斜がかかるマンサード屋根、その東側に寄棟屋根の待合室、北側に切妻屋根の事務所、宿直室、休憩室が配置される。外壁は褐色のモルタル塗り仕上げ、内部は漆喰塗りで腰部にはタイルが張りめぐらされている。

駅舎主屋西側のプラットホームに立つ上屋も開業時のもので、東西27.4m、南北6.4mであり、5組の独立柱とその上部のトラスによって小屋を支え柱とトラスはボルトで固定されている。この駅舎とプラットホームは平成17年（2005）12月26日登録有形文化財に登録認定されている。

西桐生駅周辺には同時期の洋風住宅や和洋折衷住宅が残り、特に北方にあたる宮本町には文化住宅群が形成されていた。駅舎は文化住宅群の玄関口として、また、桐生織物の近代化を象徴するものとして、意匠を凝らして建築されたことがうかがえる。

昭和初期のモダンな洋風建造物として80年以上の時を重ね、今なお開業当時の姿を留める近代化産業遺産である。平成10年（1998）には「関東の駅百選」に選ばれている。

- 住所：桐生市宮前町二丁目1-3
- 国登録有形文化財